

## 『オオサンショウウオの涙』

05.9.8

自然愛・環境問題研究所  
総括研究員 浅野 隆彦

「水資源機構」は、川上ダム建設に伴う自然環境への影響について（H17.7.1 付）を発表している。

私は、「伊賀・水と緑の会」代表 森本博氏と共に、4月27日、「川上ダム建設所」所長、副所長、環境課長などと会見し、『生態系について、既知の知識は乏しく、特にオオサンショウウオ、中でもその幼生についての未知のヴェールが広がっている。5年、10年でなく、又、人工保護池でなく、自然のフィールドに於ける40年、50年の調査・研究がなければ、ホントウの所が判らない。確実な調査を続け、安易な結論を出す事がないよう希望する。』と要請した。これは、『第9回川上ダム オオサンショウウオ調査・保全検討委員会』が、2月19日、貯水予定地に生息する116匹を上流に移転させるという「保全対策」を決めた事への危機感からであった。その問題点は、意見書 No.583 『オオサショウオを泣かせるな！』に述べている。

さて、文頭の説明資料に次の内容がある。

『移転試験により湛水予定地内で確認された成体50個体を、湛水予定地よりも上流に移転し、その後の追跡調査により移転した50個体のうち18個体を確認した。』

その結果、最捕獲した個体は、移転先から移転前の生息地（湛水予定区域）に戻る傾向は見受けられず、ほぼ定住している。体重は、高密度に分布した地点に移転した個体は体重を減らし、低密度に分布した地点に移転した個体は体重を増やしているという傾向が伺えた。』

標識をつけ移転させたそう広範囲でない試験地で、36%（18/50）しか再確認されていない。こらは明らかに、「過密戦争による死」が想定される。普通に生きているなら、日々体重が増えるのが当然であり、体重が減っている個体群があるというのは、いかに「移転」という「保全対策」が「反科学的愚策」であるかを示す証左であろう。

移転の32個体のみが死んだのではなく、争うことになった先住個体も何匹か死んでしまった可能性がある。

オオサンショウウオの涙は辛く、濁ってしまった。